

## 商品化される貧困

——『にあんちゃん』と『キューポラのある街』を中心に——

林 相珉

こんにちは。九州大学大学院博士後期課程3年の林相珉と申します。菅聡子先生の次の二番バッターというのはとてもプレッシャーですけれども、先生のご発表の中に出てくる明治期の立身出世主義の暴力性という問題は、今日の私の発表とも少しリンクしていると思います。

本日のタイトルは「商品化される貧困－『にあんちゃん』と『キューポラのある街』を中心に」です。まず、何故、作者も出版年度も違う二つの作品を同時に論じるかについて簡単に説明いたします。『にあんちゃん』が出版されたのは1958年の11月<sup>1)</sup>。そして『キューポラのある街』の雑誌連載開始は1959年9月です<sup>2)</sup>。時期的には、ほぼ1年の開きがあります。しかし『にあんちゃん』の売れ行きから考えますと、59年3月には20万部、4月には30万部、そして夏の上半期ベストセラートップとなり、10月には50万部にまで伸び、同じ月に映画も公開されることとなります。『キューポラのある街』の連載開始が映画公開一ヶ月前なので、二つの作品は時期的に連続していると言えます。

もう一つは、映画における連続です。『にあんちゃん』を撮った監督は、今村昌平です。そして、『キューポラのある街』の監督は浦山桐郎。浦山桐郎は1954年に日活に入社して以来、今村昌平の全作品の助監督を務めていて、今村昌平は『キューポラのある街』製作の時には脚本の共同ライターとしても参加しています。そして、もう一つは、物語のあらすじがかなりの部分、重なっていることです。たとえば、安本一家とジュン一家は、どちらも貧乏一家です。安本一家は佐賀の小さな炭坑町の貧乏、そしてジュン一家は埼玉県川口の小さなキューポラ町工場の貧乏です。そして、どちらの作品も一家の家長が会社から首になる話から始まります。在日文学研究史の中でも、二つの作品は書く主体や舞台の相違はあるものの、「いずれも朝鮮や在日朝鮮人をテーマにしたものというよりは、生存や貧困や愛をテーマにした作品であり、またそのように読まれた本である」<sup>3)</sup> という評価を受けていますように、貧困という環境から生存や愛を描いた同時期の作品として、現在まで読み継がれているわけです。しかし、二つの作品とも、出版当時は朝鮮の物語としてもしっかり読まれていました。それにもかかわらず、二つの作品からは朝鮮の影が薄れていったのです。それは何故なのか。今日の発表では、昭和30年代に最も人気があった在日を描いた二つの作品が、いかなる文脈において消費されていくかを明らかにしてみたいと思います。

それでは、まず、二つの作品の評価からです。Yahoo!ブックスにおける『にあんちゃん』の紹介には、「読みたい。この時代にこそ。貧しくても助けあい希望を持って生きたころがあった！」<sup>4)</sup> とあるし、西日本新聞社から2003年に復刊された『にあんちゃん』は、「児童虐待や家庭崩壊など「ものが豊かでも心が貧しい」といわれる現代だからこそ」読んでほしいという思いが、復刊に向けて動いた「同窓生や協力した人々」<sup>5)</sup> の共通した認識だったと伝えています。そして、

地元の『佐賀県大百科事典』を覗いてみても、「石炭不況の世相だったが、貧しい中でも明るさと優しい心を失わない兄妹の聡明さが人々の心を打った」<sup>6)</sup>とありますように、現在の我々は大事な何かを忘れかけている、あの時は貧乏でも心温かくてよかったという評価です。

次は、『キューボラのある街』の評価です。佐藤忠男は「伸び伸びと育ってゆく貧しい少年少女たちを描いた感動的な作品であった。とくに在日朝鮮人の帰国問題をクライマックスに扱って、日本人と朝鮮人の少年少女たちの友情を描いた部分などはすぐれていた」<sup>7)</sup>とっています。そして、現在、在日の中で最もラディカルな批評を展開している東京大学の国際政治学者である姜尚中も「貧しくても健気に生きる人々。(中略)民族の違いを乗り越えた厚い友情が迸っている」<sup>8)</sup>と述べているように、二つの作品に共通している評価は、今と昔を直線的に接続して、「昔はよかった」という図式に二つの作品を乗せて、あの時の優しさと健全さを忘れてはいけないという評価です。

ところが、一見、客観的中立的な評価を受けているように見える二つの作品も、改訂過程における書き替えや削除に注目すれば、「昔はよかった」という評価は一旦保留する必要があります。たとえば、『にあんちゃん』には安本一家が朝鮮人であることが分かる、表面的な次元が3ヶ所あります。1つ目は、兄の喜一が「ちょうせん人」ゆえに炭鉱に正社員として「にゆうせき」できないことを語る場面です。2つ目は、居候している宮崎家のおばさんから、「binbo tyosenjin deteike」と言われた場面。そして、3つ目は宮崎家から追い出され、山奥で炭焼きをしている同じく朝鮮人の関さんにお世話になる場面です。高一は関さん夫婦について、「ほくも朝鮮人の父母からうまれたのではあるが、朝鮮人は大きらいだ。朝鮮人といえば、無学で無茶で、人からにくまれるようなことしかししない。たいてい馬鹿にきまっている。馬鹿な朝鮮人を見ると、ほんとうに腹が立って仕方がない。その中で良い人もかなりいる。けれど、馬鹿な朝鮮人があまりにも多いから目立たないのだ。良い人のために、馬鹿な朝鮮人は少し遠慮してもらいたいものだ」と書いています。この3の記述は1と2の表現とは明らかに違います。3では、高一は朝鮮人を「馬鹿」と「良い人」に分節化しています。「馬鹿な朝鮮人」と自分の間に差異の線を走らせ、自分を「良い人」として位置付けようとしています。しかし、「良い人」である高一は、結局「朝鮮人」という言葉でくぐられ、「馬鹿な朝鮮人」である関さん一家に居候せざるを得ない逆説的な現実と直面するわけです。当然、そこには「私が私であること」と「私が朝鮮人であること」のズレがあったはずであり、そのズレには、何故、日本には「馬鹿な朝鮮人があまりにも多い」のかと思う高一の問いが含まれているとも言えます。しかし、このズレについては1975年の改訂版以後は問えなくなります。何故なら、改訂版に際して、3の高一の日記は綺麗に削除され、その後出版された本は基本的に1975年の改訂版を定本にしているため、初版以外を手取る読者は3の高一の日記は読んでないことになります。

このような事情は、『キューボラのある街』と少し似ています。たとえば、北朝鮮に帰国する在日朝鮮人のサンキチは、タカユキから餞別としてハトをもらいます。正確には、最初は帰国船が出る新潟に向う途中の駅で飛ばしてくれ、とタカユキから頼まれていました。しかし、酔っ払ったタカユキの父親が、サンキチが息子のハトを盗んだと勘違いして、「チョーセン」「ぬすつとめ」と罵倒したため、結局、タカユキはハトをサンキチにあげることになったのです。そして、この場面は小説のエンディング近くで次のように回想されます。「タカユキはコオロギ島の空き

地の巢へ、さびたとびだしナイフをとりにいったときを思いだす。北朝鮮へかえるサンキチを父が盗っ人呼ばわりをしたときのことだ。タカユキは父の卑屈さにはらをたて、恥ずかしさ、憤りに目くらみながら、（やっつけてやる、やっつけてやる）と、無意識につぶやき、ドブ川べりをコオロギ島まで走っていった」とあります。しかし、この場面は映画公開後に出版された改訂版では、綺麗に削除されています。すなわち、親子にあった乖離は削除され、一家団欒の物語として結ばれているわけです。注意したいことは、家族愛や兄弟愛という評価に亀裂をもたらしかねない記述を、不協和音として排除していく力学の正体です。

その力学の正体を考える上で注目すべきは、学校という空間です。同時代の言説を眺めてみれば、『にあんちゃん』の売れ行きには、学校という空間が密接に関係していることが分かります。たとえば、「なにがそんなに反響を呼んでいるのか。（中略）「純愛もの」のもつ強みもあろう。それに学校の先生らの推せんがある。これはこども達にとっては絶対だ<sup>9)</sup>とあるし、「大人に対して、教師に対して一人の子供がいろいろ訴えている」<sup>10)</sup>とありますように、教育の場で『にあんちゃん』はけっこう役立つ本として売られています。出版社の光文社も「全国各地の小学校、中学校、高校で、「生徒父兄の必読の本」と推薦されています」<sup>11)</sup>など、学校という空間での人気ぶりをアピールする形で広告を作り上げています。この点、『キューポラのある街』も同じです。彌生書房のカバーの推薦文には、「今の子供は何を考えているのかよくわからないという世の親達や先生方はよくかみしめてよんでほしいし、小学上級生や中学生も面白く楽しく読める作品」とありますように、二つの作品とも学校という空間を強く意識していたことが分かります。

それでは、学校という空間で具体的にどのように読まれたのでしょうか。その受容のされ方を考える上で、具体的にその様子が伺えるのが読書感想文コンクールです。コンクールは、毎日新聞社と全国学校図書館協議会の共催で行われたもので、第一回目は1955年です。『にあんちゃん』がベストセラーになった1959年度の入選作は、小学校の部と中学・高校の部を合わせて、合計24件の感想文が入選されています。作品順からは3位、そして小中学生に読まれた順位からは2位です。小学生からは16件、中学生からは8件が入選されています。

次は、全国学校図書館協議会会長賞を受賞した作文を少し見てみたいと思います。「もし、私が末子さんだったらどうでしょう。今ごろは、貧乏におしつぶされて、ひねくれっ子になっていたかもしれません。（中略）ここまで書いて来て、私はふと、五年のとき習った社会保障ということを思い出しました」とあり、その後、「あのときどうしてそれが利用されなかったのかと、私は残念でたまりません」<sup>12)</sup>と結んでいます。上の感想文で注目したいところは、「残念でたまりません」と惜しむ「私」です。この「私」は安本一家が朝鮮人であることには、一切触れていません。ましてや同時代の在日朝鮮人の生活保護の被保護者数が1955年の12万人から、1957年には約8万まで削減されていたことには、当然、小学生の「私」は知るすべもなかったでしょう。しかし、この「私」なるものは、それほど子供でも透明でもありません。

何故なら、コンクールの入選作は次の年に一冊の本としてまとめられていて、そこには入選作とともにコンクールの主催側から学校の先生向けに「指導者のために」という欄が設けられています。その中身とは、いわゆる入選作を多く出すためのコツの伝授です。たとえば、主催側は大阪の中学校、千葉の小学校など、たくさんの学校を紹介しながら、これらの学校は「毎年上位入賞者を出す伝統ある学校」と誉めます。そして、こういう学校は「ほとんどが全校を

あげてコンクールに参加し、その中から優秀な作品を選び出す」形を取っている。だから、コンクールに興味のある学校は「ぜひこのかたちをとっていただきたい」と、毎年、主催側の採点ポイントを発信しつづけるわけです。見事なコラボレーションです。学校は生徒に優秀な作品というお題目で鼓舞し、主催側は学校を伝統ある学校として賞賛します。そこに生徒の名前があがることは心の健康優良児として認められることであり、そこに学校の名前があがることは、全国の理想校として評価されることを意味します。しかし、注意すべきは、優秀な作品とは、心の健康優良児から自然分娩されるものではなく、主催側と学校の管理下で生産されていることです。

次は、安本一家が朝鮮人であることに言及している感想文を考察、そこからコンクールの管理システムのパラダイムを描き出してみたいと思います。それによって「残念でたまりません」と惜しむ「私」の位相も、明らかになるはずです。まず、小学校5年生の林登代子は「なぜ朝鮮人だといけないのか、私にはおとなの事はよくわかりません。けれどもにあんちゃんの記事の中に『朝鮮人はよい人も多いが無学で無茶で人から憎まれる事しかしないからきらわれるのだ』とあります。私も何だかそんな気もします」とあるように、朝鮮人を勤勉であるかどうかで分節化します。6年生の三宅芙美子は「両親がいない安本さん一家が朝鮮人であるため苦しまねばならない。(中略)私が社長という立場に立ってみればなるべくできることはしてあげたい」と結んでいます。そして、同じく6年生の森岡京子は「なぜこの人たちは、民生委員の人に話さないのだろう。話しても、朝鮮人だから助けてもらえないのだろうか」とあります。以上の感想文は、前述した全国学校図書館協議会会長賞を受賞した「私」とは違って、安本一家が朝鮮人であることに自覚的です。しかし、その自覚から何を考え、どのような結論を紡ぎ出すかと言えば、朝鮮人と聞くと変な気持ちになるのは何故か、朝鮮人ゆえの差別は国で決めているだろうか。それにしても、何故、安本一家は民生委員に頼んで社会保障を利用しないのかと悩みます。そしてその後、差別はよくない、私ならなるべくできることはしてあげたい、と反省する形で結びます。ここで大事なのは、これらの感想文は安本一家の差別には自覚的にもかわらず、その差別を作り出している国の差別構造を想像／批判する姿勢が欠けていることです。

勿論、反省する形の感想文なら何でもいいかという、そうでもありません。コンクールの主催側は、「勤労青少年の部の作品全般」を取り上げて、「やたらにむずかしい言葉を使うから、内容の貧困さが目につく」、「視野」が狭い、「本のえらび方が適切でない」と厳しく叱咤を下しています。その後、「ひとりで独走しても、労多く功がすくない」から、「なるべく読書の仲間と交際」すべきだと勧めます。主催側の言う「読書の仲間」とは、学校の先生を頂点とする仲間にはかならず、要するに、コンクールのパラダイムにしっかり反応しろということです。一見、透明に見えるコンクールには、たくさんの駄目押しが仕掛けられているわけです。だから、このような内省のパラダイムから『にあんちゃん』を読むという読書行為は、子供の内省を促す範囲ならかまわないけれども、その範囲を逸脱する読みは入選できないことを意味します。朝鮮人の偏見を反省するのはいいけど、背伸びして深読みする読書行為は、あらかじめ菌止めがかかっているわけであります。その結果、自分の生活の内省を促すところに力点が置かれ、それには何の役にも立たない関さん一家は排除される仕組みになっています。内省のパラダイムでは、関さん一家は駄目な人間の標本として分類されます。だから、安本一家の不幸を「無

学で無茶で人から憎まれることしかない」関さん一家のせいにする感想文さえも書かれるわけです。『にあんちゃん』は内省を促すパラダイムの中で、ガンバリ屋さんとして読まれた／読まされたのです。それゆえ、朝鮮人の物語として読まれたにもかかわらず、内省のパラダイムが生産するガンバリ屋さんの物語に回収され、朝鮮人の影は薄れていったと思います。

実は、内省する子供を作り出す読書感想文は、同時代の二つの道徳をめぐる議論と連動していました。議論のきっかけは、1958年に制定された小中学校の「学習指導要領」です。二つの道徳の一つは、戦後の社会科で行われた道徳であり、もう一つは戦前の修身教育を引き継いだ道徳です。『朝日新聞』はこのような同時代の地殻変動に敏感に反応して、道徳に賛成／反対の論客を訪ねて特集を組んでいます。道徳教育に賛成の中央教育審議会会長の天野貞祐は、記者から「道徳教育は修身の復活との非難がありますが」と質問されて、「いまの社会科は内省が欠けている。子供に“批判しろ”とばかり教えている。子供のときから親のいうことにケチをつけるようなものは、浅薄な人間になってしまいます」<sup>13)</sup>とアメリカ主導で行われた「社会科」を批判しています。そして、道徳教育に反対している東北大学教授の佐々木嘉彦は「困るんだな。貧しさから抜け出すのに“尊徳の勤勉を見習え”では無責任きわまるよ。個人の力には限りがあるんだから」<sup>14)</sup>と道徳教育を二宮金次郎の再来として断固反対します。しかし、1954年には教育員の政治行為を制限する「教育二法」が制定され、また1956年には教育委員会の公選制の廃止、そして1956年からは文部省指導で改正され、1958年には各府県で実施された教員の勤務評定が制定されていますように、日本の教育界は戦後のアメリカ主導型から日本主導型へと変換されているわけです。法元吉隆も伝えているように、同時代の道徳教育の復活に煽られ、全国の「石屋さん、銅像屋さんに、空前の金次郎ブーム」<sup>15)</sup>が訪れていたと伝えています。

このような同時代の地殻変動は、『にあんちゃん』のカバー文にもその痕跡を残しています。初版のカバー文には、「極貧の生活と耐えがたい心の痛みにもよくたえて生きてゆく人間の姿が、少女の筆でこんなに力づく書かれているのは、読者にとって大きな驚きと感激となるであろう」と書かれてありました。しかし、ほぼ1年後には、「子供たちばかりでなく、世の母や父たちまでも、明るく今日を生き、明日への希望に胸ふくらむ人生の道標の役割を果たしてくれることを期待したい」と書き替えられています。つまり、安本一家は、貧乏の耐え方を見本として提示する役割を担わされているわけです。この時、大事なものは、「明るく」という言葉です。貧乏にへこたれることなく明るく耐えて生きていくからこそ、安本一家は「人生の道標」たり得たのです。

ここで気になるのは『キューボラのある街』における、ジュンとタカユキの「明るさ」です。作者の早船ちよは作品の主題について、「中学三年生のジュンを主人公に、いわばその〈近代的自我〉の目覚めを、心とからだの両面から、その成長過程を追及していくことにあります」と書いています。勿論、問題は目ざめや成長の方向性に他ありません。次は、二つの場面を取り上げ、ジュンの成長に帰国事業がどのようにかわってくるかを考えてみたいと思います。具体的には、映画公開前の彌生書房版と公開後の理論社版を比較しながら、ジュンの成長の方向を追ってみます。

まず、一つ目は、帰国する在日朝鮮人の歓送会の出席を頼まれたおばさんのハナエとジュンの会話です。ハナエの夫は、対馬海峡で漁業中に韓国警備船に拿捕され、釜山の刑務所に抑留

されている状態です。歓送会の出席を頼まれたハナエは、「誰がチョーセンのためにヒマなものか」と怒ります。それに対して、彌生書房版では、ジュンは「歓送会には私が行く」と答えています。ところが、映画公開後に出版された理論社版では、怒るハナエに対して、おばちゃんは「南と北と、ごちゃまぜにしている」、おじさんを捕まえたのは韓国だから、文句があるなら韓国に言うべきであり、北朝鮮に帰る人々に言うのは「けんとうちがい」と正論ばいことが言えるくらい成長しています。

二つ目は、帰国するヨシエとジュンの会話です。国籍問題から起こる就職差別故の帰国を語るヨシエに、彌生書房版では「むろんよ」と答えていたジュンは、映画公開後の改訂版では「憲法の基本的人権」を内面化していて、ヨシエに対して「すまなさ」を覚える主体として語られるなど、物分りのいいおりこーさんに成長しています。その後、ジュンは「ヨシエは、わたしたちのなかにまじって育ってきて、これまでに、いうにいわれない悲しみも、憤りも、胸にたたみこんでいることがあっただろう。その気持ちをのりこえて、いま、純粹に喜びにあふれて、うたっている」と解釈しながら、「働きながら、しごとから学びたい」と言ったヨシエの言葉に「はっと」させられ、高校進学か就職かに迷っていたジュンは、「働きながら、学ぶ」ことを決意します。いわゆる、ジュンにおける「近代的自我」の目覚めの瞬間です。勿論、注意すべきは、目覚め／成長の方向性に他ありません。

まず、二つ目の場面からです。ジュンは、帰国を決意したヨシエは純粹に喜びにあふれていると解釈します。しかし、実は、ヨシエ一家における帰国とは、一家バラバラをも意味します。何故なら、日本人であるヨシエの母親（日本人妻）は、帰国を拒否したからです。ヨシエの父親によれば、母親にとっては「やっぱり、生まれ故郷—ニッポンが、祖国だからな」ということです。「日本人妻」であるヨシエの母親は生まれ故郷「ニッポン」を離れて、言葉も文化も違う国へ行くには抵抗があったのです。勿論、大事なのは一緒に行くかどうかではなく、帰国事業を「朝鮮人」（帰る人）と「日本人」（帰らない人）という図式で捉える瞬間、少なくともヨシエ一家の悲劇は捉えきれなくなることです。そして、最も深刻なのは、ヨシエ一家の悲劇を忘却させつつも、ヨシエに対して「すまなさ」を覚えるジュンは、最も良心的な「日本人」として評価されることです。

そして、次は、帰国事業にヒステリックになっているハナエです。ジュンは、帰国する人々は北朝鮮に帰るんだから、文句は韓国に言うべきだと正論ばいことを言っているけれども、同時代の言説を眺めれば、ハナエのヒステリックを単純に「けんとうちがい」として片付けるわけにはいきません。1959年2月、帰国事業が日本の国会で正式に決定された途端、韓国政府は日韓会談を中絶、そして釜山に抑留されている日本人漁夫の不送還を通告してきます。韓国からの通告と同時に、抑留日本人漁夫の留守家族や漁夫関係者は、政府や関係機関を訪ね、早期送還を訴えるなど、当時のメディアも帰国事業がもたらす波紋として大きく取り上げていました<sup>16)</sup>。つまり、帰国する在日朝鮮人を目の前にして、ヒステリックになるハナエは「けんとうちがい」ではなく、帰国事業と抑留漁夫の送還問題は相互波及的な影響を与える関係だったので、だから、ジュンの成長の方向性は、帰国事業がもつ政治性を脱政治化するものであり、帰国事業をあくまでも「人道問題」として押し切った当時の日本政府の見解と限りなく近いものとも言えます。

しかし、とても興味深いのは、ヒステリックだったハナエが一瞬にしてその態度を変え、帰国者の良き理解者に転じる場面が訪れることです。あれほど歓送会に行きたがらなかったハナエは、一つの歌をきっかけに「あたしも、見送りにいこうかな」と変わります。歌とは、歓送会の時に駅前の広場で歌われた曲で、韓国詩人・柳致環（リユー・チーフアン）が作詞した「かっこう」という歌です。歌詞は「かっこう鳥がなく／かっこう かっこう！／愛するふるさとよ／労働がしあわせの扉をたたき／労働が花を咲かすところ／ああ とわによきところ／かっこう鳥がなく／かっこう かっこう！／ああ わたしのふるさと／母のふところ」という内容の歌です。

ところが、注意すべきは、同時代の言説の中には「かっこう」という歌はどこにも見当たらないということです。たとえば、帰国船が待つ新潟に向う品川駅のプラットホームでは、北朝鮮の国歌である「愛国歌」<sup>17)</sup>の大合唱が行われ、そして新潟から帰国船が出港する時は、北朝鮮の第2の国歌とも言われている「金日成將軍の歌」<sup>18)</sup>が歌われたと同時代の新聞は伝えています。勿論、同時代に「かっこう」という歌が歌われていた可能性自体を否定したいわけではありません。そうではなく、大事なのは、ハナエは帰国列車が出る各駅や新潟港で歌われていた「愛国歌」や「金日成將軍の歌」のように、ある特定の国家や民族を称揚する歌とは距離を取り、国家や民族が抜け落ちた「かっこう」の歌を口ずさみながら、帰国者を見送っていたということです。つまり、ハナエは釜山の刑務所に抑留されている夫に思いを走らせ、「かっこう」の歌の「愛するふるさとよ」のところに力点を置きながら、北朝鮮帰国事業が巻き起こす日韓の政治問題を家族の離別問題にずらして再文脈化したのです。

そして、進学か就職かを悩んでいたジュンは、差別を作り出す日本の社会構造を批判的に考えようとせず、ましてやヨシエ一家の悲劇を想像だにすることなく、「労働がしあわせの扉をたたき／労働が花を咲かすところ」に力点を置きながら、「近代的自我」に目覚めていったのです。在日朝鮮人のヨシエの帰国がジュンにおいて意味をもつのは、国籍故の差別問題でも一家バラバラの家族問題でもなく、まさしく「働きながら、学ぶ」を再確認してくれるからに他ありません。

見田宗介は、明治の国民的アイドル・二宮金次郎は立身出世主義の「民衆用の準抛像」としての役割を担い、「小学校しか行くことのない多くの民衆のうちからも、能動的エネルギーをたえず開発しつつ、しかもこれを、体制の秩序のうちにあたえずとじこめておこうとする、支配層の二重の要請に最も適合するもの」<sup>19)</sup>だったと指摘しています。

『にあんちゃん』と『キューボラのある街』における明るい「能動的なエネルギー」、それは敗戦後の欠如の時代から理想の時代に向う、日本の高度経済成長を駆動させるエネルギーでもあり、そのパラダイムの中で二つの作品は読まれ、その結果、朝鮮の影は薄れていったのではないかと思います。発表は以上です。ご清聴、ありがとうございました。

## 注

- 1) 『にあんちゃん』は1958年11月に光文社から出版。その後、59年1月15日から2月27日までNHKラジオからドラマ化されている。59年10月28日に日活から映画公開。そして75年には同じく光文社から増補新版が出版。77年にはちくま少年文庫、78年には講談社文庫、そして2003年には西日本新聞

社から復刊されている。

- 2) 『キューボラのある街』は雑誌「母と子」に59年9月から60年10月まで連載。その後、61年に彌生書房から最初の単行本が出版。62年4月8日に日活から映画公開。そして63年には理論社から改訂版が出版。77年には講談社文庫、91年にはけやき書房から出版されている。
- 3) 鄭大均『韓国イメージ』(1995・10、中央公論新社、27頁)
- 4) 「書籍紹介」([http://books.yahoo.co.jp/book\\_detail/AAO14675/](http://books.yahoo.co.jp/book_detail/AAO14675/))
- 5) 萩原昭男「復刻版に寄せて」、『にあんちゃん』(2003・6、西日本新聞社、313頁)
- 6) 八田千恵子「にあんちゃん」、『佐賀県大百科事典』(1983・8、佐賀新聞社、630頁)
- 7) 『増補版 日本映画史3』(2006・12、岩波書店、39頁)
- 8) 「姜尚中 映画を語る—『キューボラのある街』」、『第三文明』2008・4、38頁)
- 9) P・Q「ベストセラー」(『図書新聞』1959・2・28)
- 10) 品川不二朗「私が推薦するもの」(『図書新聞』1959・3・7)
- 11) 「朝日新聞」(1959・3・29)
- 12) 感想文の引用は『第六回 読書感想文』(1961・5、毎日新聞社)
- 13) 「“道理の感覚”を一貫 道徳教育説く」(『朝日新聞』1958・1・4、夕)
- 14) 「農家改善、気軽に世話」(『朝日新聞』1958・1・13、夕)
- 15) 「二宮金次郎・美徳の正体」(『人物往来』1958・5)
- 16) 「北鮮帰還」の波紋」(『アサヒグラフ』1959・3・8、8頁)
- 17) 「『愛国歌』に送られて出発」(『毎日新聞』1959・12・21)
- 18) 「帰還第一船新潟出発」(『毎日新聞』1959・12・14、夕)
- 19) 『現代日本の心情と論理』(1971・5、筑摩書房、189頁)